

そよかぜだより

第96号
発行 2010.5.16
毎月1回発行
社会福祉法人
そよかぜ

連絡先

ひばり園 578-0855
FAX 578-0466
くれよん 578-2575
つくしの家 578-0855
あおぞら 570-6110
エール 570-1233
スマイル工房 578-2723
資源回収時のご連絡は
「ひばり園」へ

障害者会議 総合福祉部会が発足

委員55人、異例の大所帯、会場は講堂を使用

政府の障がい者改革推進会議は4月27日、障害者自立

要なものを6月までに整理するためです。

支援法に替わる障害者総合福祉法を検討する総合福祉部会の初会合を開きました。遅くとも2013年8月までに自立支援法を廃止して新法制を実施する、というタイムリミットがあるので、新法制定を待たず対応すべきことは来年度予算の概算要求に反映させようと、まずは緊急対策が必

今回発足した総合福祉部会は推進会議の下の部会という位置づけで、推進会議が障害者基本法の改正、障害者差別禁止法及び障害者虐待防止法の制定など広範な議題を扱うため、テーマを絞った議論は部会を設けて深めることにしています。

ひばり園、利用者急増

このため総合福祉部会は、

7名の新利用者

ひばり園では、今年四月から7名の新利用者が増え、総数59名となりました。その後にも、個人的に施設見学に来られる方があとを絶たず、その中から何人かの人が利用希望を出される見込みです。

このように希望者が殺到するのは、施設が新しく大きくなったことに加えて、一般社会の雇用情勢の悪化などが背景にあるようです。また同時に、障害者の雇用を促進しようとする福祉の方向が広く知られるようになり、在宅していた人たちの意識の変化もあるようです。

当面は「新法制定まで放置できない」という課題を洗い出し、来年度予算に反映させる緊急対策を整理するとしています。

今回発足した部会は、障害者や家族、事業者、学識者、地方自治体など多様なメンバーで検討するため、55人で構成しています。従来の政府の審議会などでは例をみない大所帯で、会場も厚生労働省の講堂を利用する異例の対応です。

主な意見としては、「発達障害、高次脳機能障害、難病を対象にして、すぐにでもサービスを使えるようにしてほしい」「4月から低所得者の福祉サービスは無料化されたが、自立支援医療は残っている。これも早く無料化を」「移動支援事業を義務化し、市町村の裁量にゆだねず国の予算を確保してほしい」といったものです。

山井和則・厚労政務官は冒頭「当事者の声を十分に政治や行政が聞いてこなかったという反省に立ち、世界に誇れる障害者福祉に変えていく歴史的な取り組み」だと期待を述べました。

社会福祉法人 そよかぜの

《資源回収》に

ご協力をお願いします
新聞、雑誌、ダンボール

(ボロは扱っていません)

4月は39,700tでした。金額は683,121円となりました。この収益は、社会福祉法人そよかぜの運営資金になります。みなさまのご協力ありがとうございました。

6月は第3日曜日20日です。

ご協力ありがとうございました。

(順不同)

4月の募金 34,370円

帯刀 幸子 様	臼井 信行 様	天満 喜代子 様
井上 誠一 様	大野 元雄 様	田中 明子 様
藤野 和子 様	森田 勝 様	平岡 知子 様
山下 暉枝 様	宇津木 牧夫 様	北野 浩美 様
佐藤 佐夫 様	国本 昭治 様	本町一東寿会 様
濱野 岬 様	袴田 実 様	草間 哲夫 様
川崎 利男 様	古沢 奈保美 様	山影 幸子 様
清水 賢 様	大内 たま子 様	橋本 亜紀子 様
清水 知子 様	田村 由親子 様	本間 正彦 様
斉藤 忠 様	田村 千佳 様	田中 稔 様
榎本 正代 様	清水 キヨ子 様	長谷川 キヌ子 様
松岡 竹子 様	尾又 恭子 様	角野 克子 様
角野 満壽子 様	関村 理 様	小沢 達子 様
竹内 照夫 様	関村 英希 様	平野 嘉子 様
阿部 郁子 様	下田 コウ 様	大野 素子 様
吉野 満里子 様	土屋 三枝子 様	ア-サロンカワノ 様
山崎 六雄 様	永岡 智恵子 様	桜沢 喜作 様
ア-バンベンディックス 様	榎八洋 様	匿名様(4,603)

ご連絡は、ひばり園へ
羽村市栄町3-3-1
042-578-0855

くれよん4月の売上げ
757,750円でした。

羽村市内の小学校と中学校の生徒のみなさんが、各学校単位でプルトップ収集にご協力して下さっています。ありがとうございます。

「手を振るひとに」どう返事をするか

単なる挨拶か、助けを求めているのか

正しく見分けることは至難のわざ

先日、前のひばり園の利用者が一人、新しいひばり園にひよっこり姿を見せました。なにか用事があるようではなく、なんとなく新施設を見に来た感じで、自転車に乗って前の道路を何回も行ったたり来たりしていたので、手招きすると入ってきたのです。五年ほど前まで毎日ひばり園に通っていた女性の利用者です。

いまどうしているのかと様子を聞いても、詳しいことは何も話してくれません。会話はできる人なのですが、自閉的な傾向が強いので、自分に都合がわるい質問には答えず黙り込んでしまいます。親と同居していた頃は毎日ひばり園に来ていたのですが、口うるさく注意する親を嫌って好きな男性とアパート暮らしをするようになってからひばり園には来なくなりました。

その後、風のうわさで男と別れたという話は聞いていま

したが、そのことについては

ノーコメントです。彼女が黙ってしまおうと何を聞いてもむだなことはよく知っているのだ、それ以上の追求はできません。ただ、親と同居していたときに勝手に家をとび出して何日も帰らずホームレスに近いような暮らしをしていた頃に比べれば、身なりはまあ整っているし顔色も悪くはないので、心配することもなさそうだと思います。しばらくとりとめのない話をして帰りました。

そんなことがあってから数日後、普通ならもう忘れてしまはずなのに、なぜか彼女のことが気になります。自閉症で人付き合いが嫌いなのにわざわざ来たのは何か訴えたことがあるのではないかと、でも人の顔をみるといい出せなかつたのではないかと、などと思ったりするのです。その根拠らしきものは何もないの

に妙に気になるのはなぜだろうと、今度は自分の気持ちがお不思議になります。それでなんとなくすつきりしない気分でしたところ、ふとその原因に思い当たりました。何ヶ月か前に新聞で読んだ短い記事のことが頭の隅に残っていて彼女のことがきつかけで心に浮んできたからです。作家の落合恵子氏がある新聞のコラム欄に書いていたのですが、その大意は次の通りです。

イギリスの女性詩人の作品に次のような情景をうたったものがある。『わたしは岸辺で海を見ている。と、遠く波間で手を振るひとがいる。そこでわたしは、波間のひとに手を振り返す。そしてやがて波間のひとのことは忘れて、砂浜の貝を拾いだすかもしれないし、ポットから注いだ紅茶を飲むかもしれない。そして……しばらく後、わたしは知らされるのだ。波間で手を振っているかのように見えたひとは実は、溺れて助けを求めているのだ』と。

そして落合氏は次のように読者に問いかけます。同じようなことが日々、わたしたち

の社会で、身近で起きてはいないか、あなたやわたしの近くでいま、手を振っているひとはいいか？手を振り返すことが、わたしたちの返事でいいのか、と。

これはたしかに、福祉の現場にいる者にとって示唆と警告に富んだ文章です。ただのあいさつか単なる友好のしるしで手を振ってだけのように見えても、もしかすると必死で助けを求めて危険信号を出しているのかもしれない。そのつもりになって、あらためてまわりを見渡してみると、先に紹介した彼女も含めて、「手を振っている」ように見える人がじつにたくさんいることに気がつきました。

障害者福祉の現場ですから、そのような人がたくさんいるのは当たり前でもあります。とくに知的障害や精神障害の場合は、危険信号を出しているも、その通りに見抜くことがむづかしくなるので、まるで全員が手を振っているように見えないとも限りません。

本当に助けてほしいのだけれど、それを誰にどのようにな

い、そこで手を振ってみたいけれど相手も手を振っただけ、というようなことがひばり園の中でも日常茶飯事に起きているのではないかと心配になってくるのです。

だからといって過敏になるのは危険です。過剰反応は逆効果になる場合が多いからです。施設の中には障害が重い人と軽い人がいるものですが、重い人に対して細かい支援をしていると、それを見た軽い人が自分も細かい支援してもらいたいと、意識的に問題を起こしてしまうということはこの施設でも経験していることです。

前のひばり園には擬似発作を起こす人もいました。まわりの状況を見て起こす意識的なてんかん発作です。これにに対して過剰反応すれば、かえってパニックを助長することになります。ひばり園でも四月から7名の新入生がありました。軽いパニックになる人、一日中、無口で口をきかない人など、その人たちの性格などをまだ把握し切っていない職員はいま手探り状態で対応しているところでは

本物の危険信号と見せかけの信号との見分けはベテラン職員でもなかなかむづかしいものです。さらには、ただ手を振っているだけに見えてもその裏に潜んでいる危険性まで正確に見抜くのは至難のわざです。

これはいま社会で大きな問題になっている子どもの虐待にも通じていることでしょう。必死で手を振っていても、サインの出し方が稚拙であればうまく人に伝わりません。わずかなきざしをいち早くキャッチして対応しなければ悲惨な事件になります。そんな事件がしばしば報道されるたびに、きつと本人は必死で手を振っていたのだらうと心が痛みます。

この問題は考えれば考えるほど間口が広がり、奥が深くなって行きます。しかし、いかに至難のわざでも障害者の支援にかかわる者は、正確に見抜く腕を磨かなくてはなりません。マニュアルのない世界ですから、経験と感性、そしてなによりも真摯（しんし）な心がまえを武器にして勝負するしかありません。